1

秋の夜に、虫聞きの会。

そもそもの始まりとなったこの風流な催しは、僕と島崎（しまざき）の住む町の一角にある都営の庭園公園で、もう二十年近く、毎年行なわれてきたものだった。

僕らの暮らす東京の下町は、いわゆるゼロメートル地帯として認識されているところで、一般的にはきわめて——僕らが薄々想像している以上に——きわめて悪いイメージをもたれている土地柄であるらしい。

ひとつ、ごみごみしていて緑が少ない。

ふたつ、土地が低いのでじめじめしている。台風なんか来るともうアウトである。

みっつ、治安が良くない。なんでだか知らないけど、ぶっそうな土地だという感じがする。いかがわしい店がいっぱいひしめき、だけどそういう店の隣に軒をくっつけるようにして窓際におしめなんかぶら下げた安アパートがあったりする。それらの家は、私道の奥のそのまた奥にひしめくようにして建っており、日当たりなんか「皆無！」というくらいで朝から電灯をつけなきゃならない。だからそういうところは容易に犯罪の温床になったりするわけで——という具合だ。

この土地に住み着いて彼で四代目という島崎に比べたら、両親供に東京近郊出身でマンション族の僕なんか、まだまだこの町から血縁として認識されるところまでいっていない「ひよっこ土地人」だけど、その僕でも、こういうあからさまな誤解を受けるとムッとしてしまう。そして不思議にも思ってしまう。

たしかに、しもたやの立てこんだ場所はある。日当たりのよくない私道の奥の家もある。だけどそんなものは、東京中のどこの町にも——よほどのお屋敷町でない限り——ありそうなものだ。なにも下町ばかりの専売特許じゃない。

土地が低いということもそうだ。ええそのとおり、低い土地です。もとが埋立地だから、それは当たり前。駅前に据えられている水位柱によると、平均的な満潮時の海面の位置は、僕の背よりも高いところにある。だけど、海とこの町とのあいだには、土手があり防潮堤があり、いくつもの水門がある。ちょうどオランダみたいなものだ。

面白いのは、みんなして、「土地が低い」ということと「水捌（は）けが悪い」ということを混同しているという点だ。どれほど土地が低くたって、設備がちゃんとしていれば、溢（あふ）れた下水でマンホールの蓋（ふた）が持ちあがっちゃうような危険なことにはならない。論より証拠、台風や集中豪雨が来るたびに、やれ床上浸水だのやれ車が流されただの騒いでるのは、下町地区じゃないでしょう？

さてさて誤解の最たるものは、「治安が悪い」というところ。これはねえ……と僕も首

をひねってしまう。治安の悪い町なんて、これもそれこそ東京中にあると思うんだけど。

たしかに、「僕が住んでるのはとっても治安のいい学園都市でーす」とは、口が裂けてもいえません。だけど、外部の人に、ジョン・カーペンター監督の『ニューヨーク１９９７』で描かれた監獄都市と化したニューヨークとおっつかっつのイメージを抱かれているとなると、こりゃ問題だ。

「思うに、やっぱりあの事件のインパクトが強すぎたんだな」とコメントするのは島崎だ。

「なんてたって、ひどすぎたからさ」

彼の言う「あの事件」とは、僕らがまだ幼稚園児だったころ、僕らの住む町よりちょっと北側の深川（ふかがわ）という地区で勃発（ぼっぱつ）した、覚醒剤（かくせいざい）中毒者による白昼の大量無差別殺傷事件のことだ。世に「深川通り魔殺人」と呼ばれて有名なこの事件について、僕らはリアルタイムの記憶を持っていない。だけど、話はよく聞いた。

この土地の人たちは、おしなべて、「確かにひどい残酷な事件だったけど、それがこの土地特有のナントカカントカだとは思わない」という見解を有している。性質としては、たとえば新宿駅構内で起こっていたっておかしくない種類の事件だったわけで、それがたまたま深川で起こってしまったというだけのこと。

ところが、他の地域の人たちには、そうは見えないものであるらしい。

象徴的と言えなくもないエピソードを、島崎が話してくれたことがある。島崎のオフクロさんが、床屋さんの組合の団体旅行に参加したときのことだ。なにかのはずみで、「最近どうもぶっそうなことが多いね。客商売としては、怖いこともあるよね」というような話になった。それについては大いにうなずくところがあったものの、だいたい根が豪気な島崎のオフクロさんは、暗いムードになるのが嫌で、笑いながらこんなふうに言ってのけた。

「あたしのとこじゃ怖がってなんかいられないよぉ。なんせ通り魔の本場だもの！」

ウケルだろうと思って笑い飛ばしながら言った言葉なのに、一同、しぃんとしてしまったそうだ。

「おふくろ、くさって帰ってきた」と、島崎は言っていた（島崎のオフクロさんの名誉のため付け加えておくと、あの事件が起こった当時、店から歩いて十分ほどの事件現場へ、オフクロさんは、毎日のように花と線香を供えに行っていたそうだ。そういう人なのだ。事件全体を笑って言った言葉ではないので念のため）。

世の中のことの九割がたは誤解の上に成り立っているものであるように思えるときもあるので、まあこの程度のことに目くじら立てても仕方ないのかもしれないけれど、とにかく、僕は僕の暮らすこの町につきまとうマイナスイメージを、けっこう腹立たしく思っている。とりわけ、僕のクラスメイトに、とってもおとなしくて目立たなくて、大勢の女性徒のなかに混じっているとほとんどいるかいないかわからないくらいなのだけれど、席替

えで隣同士になってみるとこれが実はとってもきれいな娘(こ)で、地味にしてるからわかりにくいけど顔だちも整ってて、右目がほんの少し斜視のところがまた可愛くて、よく知り合ってみると頭もよくて話も面白くて性格もよくってというクドウさんという女の子がいるのだけれど（まわりくどくてごめんなさい。だけど彼女のことはどれだけ言っても言い足りない）、そのクドウさんがとても尊敬して愛読している作家が（彼女は読書家なのさ！）、その代表作のなかで、僕たちの住む町のことをずばり一言、「民度が低い」と書いているのを発見したと嘆くのを聞いて以来、かなり腹立たしく思うようになった。

民度が低いだと？　ハハ！

とまあ、長い回り道になったけれど、うちの地域だってそうそうバッサリ斬って捨てられるほど悪くはない、それは誤解だということを言いたいのだ。その証拠のひとつが、虫聞きの会なのである。

舞台となる都営の庭園公園は、通称「白河(しらかわ)庭園」と呼ばれている。遠くさかのぼれば、江戸時代には大名家の下屋敷だったところで、それが明治になってある財界人に買いあげられ、第二次大戦後、財閥解体の際に東京都に寄付され、現在のような公共の庭園となったというものだ。入口で入観料百円を払って門をくぐり、ぶらぶら歩きで園内を一周すると、小一時間は優にかかるという広さ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。